

# 現生正定聚と浄土の慈悲(一)

——「最後の親鸞」に学ぶ——

井 上 尚 実

はじめに

親鸞の思想における「現生正定聚」の決定的な重要性は、これまでに多くの研究者によって論じられ明らかにされてきている。<sup>(1)</sup> 浄土経典にもとづいた伝統的な教理によれば、念仏者はこの世のいのちが終わって浄土に往生し、そこで仏に成ることが定まった菩薩たちの仲間入りをし、その理想的な環境において完全な目覚めを実現して仏に成ると考えられていた。しかし親鸞は、はからいを捨てて信心が揺るぎないものとなった念仏者は、この苦しみに満ちた娑婆を生きている間に、すでに仏に成ることが決まった菩薩たちと同じ境涯に入ると説いたのである。このように「正定聚」という仏教者の理想的あり方が実現する時を、浄土に往生したあとの未来から現生に移した解釈は親鸞独自のものであり、浄土教の伝統において真宗を際立たせる特徴となっている。

「教理学的見地からすると「臨終ののち極楽浄土に往生し、そこで正定聚の位に就き仏に成る」という浄土教の原理から逸脱する特異な説のようにも解されうる「現生正定聚」であるが、一切衆生に目覚めをもたらすことを課題とし

た大乘菩薩道、さらに遡って釈尊が説かれた慈悲の仏道の文脈においてみるなら、仏教の原点へと帰帰する勝れた教説ということが出来る。本論では、このような観点から「現生正定聚」の思想的系譜を明らかにするための基礎作業として、親鸞が特に「現生」に正定聚の位に就くべきなのだ<sup>(2)</sup>と強調するにいたった歴史的社会的文脈に焦点を当ててみたい。その文脈を鮮明にすることが、釈尊と親鸞に通底する思想を明らかにする上で欠かせないと考えるからである。

この歴史的社会的文脈に関しては、真宗史学を中心に、晩年の親鸞と関東の門弟たちの間に交わされた消息を中心とする文書の分析にもとづいた綿密な研究の蓄積がある<sup>(2)</sup>。ここでは、八十代半ばで長男善鸞を義絶せざるをえないほどの大きな混乱を引き起こした異義の問題が、親鸞晩年の思想深化の要因として重視されている。史料を駆使した先行研究の多くは説得力があり、「現生正定聚」が強調されていく過程はかなり鮮明になってきている。しかしながら、真宗の学術的研究においていまだ十分に考慮されていないもう一つの重要な契機がある。それは正嘉年間（一二五七～一二五八）に起きた大規模な自然災害とそれに起因する飢饉と疫病の蔓延である。晩年の親鸞が遭遇したこの大飢饉に着目し、その歴史的社会的文脈を重視する思想解明を最初に提示したのは吉本隆明（一九二四～二〇二二）の『最後の親鸞』（一九七六）<sup>(3)</sup>である。小論はその視座に学び、あらためて宗祖晩年の思想の中に「現生正定聚」を位置づけて考察することにした。

## 一 正嘉から弘長の大飢饉

正嘉元年（一二五七）親鸞八十五歳の八月から命終の翌年、弘長三年（一二六三）までの少なくとも七年間、日本列島は大災害の影響下にあった。親鸞自身が直接この情況に言及する文書は、文応元年（一二六〇）に書かれた『末燈鈔』第六通冒頭の「なによりも、こそことし、老少男女おおくのひとびとのしにあいて候うらんことこそ、あわれ

にそうらえ」という一節を除いて現存しないため、親鸞の著作を中心とする真宗研究において、最晩年の大災害という文脈が十分に意識されてこなかったように思われる。<sup>(4)</sup>

『恵信尼消息』第五通に記された親鸞五十九歳の「寛喜の内省」はこれまでも注目されており、中世最大といわれる寛喜の大飢饉（一一三〇～一一三二）と、「三部経千部読誦」を試みた四十二歳の建保二年（一一二四）の早魃については、親鸞の生涯と思想をたどる上で「信心の試練」として重要な意味をもつことが知られている。<sup>(5)</sup>ところが、親鸞がその九十年の生涯を終えた弘長二年（一一六二）も、その死を知らされて恵信尼が『消息』（第三通～六通）を書いている弘長三年（一一六三）も、非常に深刻な飢饉のただ中なのである。その状況を伝える恵信尼の言葉、「この国は、昨年の作物、殊に損じ候いて、あさましき事にて、おおかた命生くべしとおぼえず候う」（第三通）、「一昨年の霜月より、昨年の五月までは、今や今やと、時日を待ち候いしかども、今日までは、死なで、今年の飢饉にや飢死もせんずらんとこそおぼえ候え」（第四通）という一節に注意を払う真宗学者は少ないように思う。<sup>(6)</sup>しかし親鸞の思想を学ぶという意味では、この正嘉から弘長まで続いた飢饉の文脈は、寛喜の大飢饉にも増して重視されるべきである。なぜならその飢饉の間に親鸞が語り記した法語類、思想深化の過程を跡づけることが可能な史料が、「寛喜の内省」を伝える『恵信尼消息』第五通とは比較にならないほど多く残されているからである。

すでに八十代も半ばを過ぎていた親鸞であるが、正嘉元年十月から文応元年にかけて、関東の同朋のために非常に多くの書簡や法語を書き送っている。その真筆や入念に写された古写本が高田派の本山専修寺を中心に大切に伝承され、真宗史の第一級史料として専門家によって研究されてきた。中でも「善性本」と呼ばれる『御消息集』には、正嘉元年十月六日から翌二年十月二十九日の約一年の間に親鸞と関東の有力な門弟の間で交わされた書簡十一通がまとめて書写製本されており、収載文書の成立時期が正嘉の大飢饉の初期とびつたり重なる点で注目される。<sup>(7)</sup>これまでの「善性本」研究は、この飢饉の文脈をあまり考慮していないが、文面に直接語られていない悲惨な状況を念頭に置く

ことよって初めて見えてくる脈絡が存在するように思う。同時期に関東の同朋とともに親鸞のもとを訪れ、その声を耳にしたと考えられる唯田が著した『歎異抄』の場合も同様である。「師訓篇」とよばれる前半の十章、とくに第四章と第五章は、この大災害の渦中に語られた言葉として解釈するとき、その意義がより明確になる。

この埋もれた文脈の重要性を理解し、大災害が宗教的感受性豊かな人たちにどれほど大きな影響を与えたかを認識するためには、同時代の日蓮の変化と対照してみるのが有効であろう。<sup>(8)</sup>鎌倉で布教していた日蓮の場合、正嘉元年八月の関東南部地震（正嘉の大地震）に遭遇し、それが仏教者としての大きな転機となった。この地震について、『吾妻鏡』は次のように記している。

八月二十三日。乙巳。晴。戊の刻大地震。音有り。神社仏閣一字として全きこと無し。山岳頽崩し、人屋顛倒す。築地皆悉く破損し、所々の地裂け水湧き出る。中下馬橋の辺地裂け破れ、その中より火炎燃え出る。色青しと。<sup>(9)</sup>

（原漢文）

マグニチュード七・〇〜七・五と推定されているこの大地震の被害は広域にわたり、三陸沿岸に津波の被害が出たことも知られている。<sup>(10)</sup>鎌倉の壊滅的な惨状は、三十八歳の日蓮に宗教的な衝撃を与えたようである。彼はそれを契機として『立正安国論』を執筆し、文応元年、親鸞が『末燈抄』第六通を書いた同じ年に、幕府の最高権力者北条時頼に提出している。<sup>(11)</sup>勘文の体裁をとった日蓮の主著は次のように始まる。

近年より近日に至るまで、天変地天、飢饉疫癘、遍く天下に満ち、広く地上に迸る。<sup>(12)</sup>牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩すでに大半を超え、之を悲しまざる族敢えて一人もなし。（原漢文）

「死を招くの輩すでに大半を超え」という表現には誇張があるかもしれないが、その数年の間に夥しい数の死者が出ていることは間違いない。日蓮は、この危機的状況の原因は禅や念仏の流行にあるとして、『法華経』を国家の中心とすることによる救済の道を進言し、積極行動主義を先鋭化していった。

この天変地異が国家存亡の危機であるという日蓮の認識そのものは、現代の科学的見地からすると決して誇張とはいえない。正嘉元年の大地震とそれに続く飢饉は、地球規模の大災害の一部であったことが最近分かってきている。二〇一三年九月三〇日の『ナショナル・ジオグラフィック・ニュース』（電子版）は「史上最大級の自然災害に関する大きな謎の一つが解明された」として、一二五七年の五月から十月の間に起きた過去二七〇〇年間で最大の火山噴火は、インドネシアのロンボク島サマラス山で起こったことが確認されたと報じている。<sup>(13)</sup> その巨大噴火によって成層圏にまで放出された大量の火山ガスと火山灰は、エアロゾルとなって地球全体を覆って太陽光を遮り、「少なくとも二年前は、気候に影響があった」という。この大噴火によるものと思われる火山灰は、遠く日本列島にも到達していたことが『帝王編年記』によって確認される。そこには正嘉元年閏三月二十五日（一二五七年五月十日）のこととして、次のように記されている。

今旦、世間に木葉の灰燼に似たる物、天より降る。京中辺土の者多く不審を成す。但、台岳の焼ける時此の如しと。云々。<sup>(14)</sup>（原漢文）

五千三百キロも離れた京都に「比叡山（台岳）が山火事になったときのような」降灰があったということからも、一二五七年のサマラス山噴火が桁外れの規模であったことが分かる。

翌一二五八年は「夏のない年」で作物が実らず、絶え間ない降雨による洪水で大きな被害が出たことがヨーロッパの古文書に記録されている。極端な冷夏は数年間続いた模様で、多くの餓死者が出ている。ロンドンにおける近年の市街地発掘調査では、この時期に埋葬された一万五千体の遺骨が一七五箇所の集団墓地で見つかっている。これは当時のロンドンの人口五万人の約三分の一にあたり、主として貧困層の人びとが餓死して埋葬されたものと推定されている。<sup>(15)</sup> 文応元年（一二六〇）には、京都の街も餓死者が路上にあふれ、同様の悲惨な状況にあったこと示す史料が残っている。『百鍊抄』の五月五日の条には、「近日、十三四ばかりの小尼が一条壬生で死人を破食していた」とあり、

「未曾有の事か」と記されている。<sup>(16)</sup> 親鸞も蓮位も、おそらく唯円も、このような飢餓状態の京都に生活していたことを想う必要がある。

親鸞が信頼をよせた関東の門弟の中で、正嘉二年（一二五八）に亡くなっている真仏や覚信の場合も、その死は何らかの形で蔓延する飢饉と疫病が関係があった可能性がある。両者とも、正嘉年間に文字通り「身命をかえりみずして」京都を訪れ、親鸞のもとに滞在している。親鸞が関東の同朋の中心的指導者として期待していた真仏は、この年の三月八日に五十歳で命終している。覚信の場合は、旅の途中で罹患した病を押して京都に着いた後、十月の初め頃、親鸞と蓮位に看取られて最期を迎えている。二人の死が、年老いた親鸞に深い悲しみをもたらしたことは想像に難くない。『御消息集』（善性本）正嘉二年十月二十九日付の慶信（覚信の子）に宛てた蓮位添え状の結びには、咳の病を患って床に就いていた親鸞にその添え状の内容を確認してもらうため読み上げたところ、覚信の最期の様子を知らせる結びのところになると「御なみだをながさせたまいて候うなり。よにあわれにおもわせたまいて候うなり」と記されている。<sup>(17)</sup>

「なによりも、ござことし、老少男女おおくのひとびとのしにあいて候うらんことこそ、あわれにそうらえ」という『末燈鈔』第六通冒頭の一文は、右のような大飢饉の文脈においてみると、言い尽くすことのできない親鸞の悲しみを表していることが分かる。それに続いて、「ただし、生死無常のことわり、くわしく如来のときおかせおわしましてそうろううえは、おどろきおぼしめすべからずそうろう」とあるのは、人間の力ではどうしようもない自然の脅威や死の現実と直面して動揺する人びとの悲しみに共感しつつ、菩薩道における「忍」の大切さを伝えようとしているもののように思われる。菩薩の「目覚め」を表す「法ゾルマ忍シヤレンテ」という仏教語は、「存在（ダルマ）」と「忍耐（クシャーンティ）」の合成語で、もともと困難な情況・環境の中で耐え忍ぶ力を意味した。その忍耐が、苦悩のただ中でたじろぐことなく衆生のために働き続ける菩薩の力として、「寛キヤクり」とほぼ同義の「諸法の実相に安住するこ

と」という意味を持つようになったのである。<sup>19)</sup>『末燈鈔』第六通において、そのように積極的な意味をもつて語られているのが「正定聚に住すること」である。親鸞は、人びとの不安を取り除くように丁寧な言葉遣いで、次のように断言している。

善信が身には、臨終の善悪をばもうさず、信心決定のひとは、うたがいなければ、正定聚に住することにて候うなり。さればこそ、愚痴無智のひともおわりもめでたく候え。如来の御はからいにて往生するよし、ひとびともうされ候いける、すこしもたがわず候うなり。としごろ、おのおのにもうし候いしこと、たがわずこそ候え。

〔定親全〕三、書簡篇七五頁<sup>(20)</sup>

このように、それが語られた文脈を考慮するならば、往生に関しては臨終のあり方を問題にせず、生きている間に信心決定して正定聚に住することが何よりも大事だという親鸞の言葉は、大災害によって家族や知人を失い悲嘆に暮れる人びとに、自信と希望を与える働きをもつ慈悲の表現であったことが分かる。「現生正定聚」は、人間の生と死の厳しい現実を前にした「あわれ」という思い、他者の苦しみを共にする心（compassion「共苦」）から説き出されている。そしてそれは、絶望的ともいえるような娑婆世界において、あらゆる人に開かれた、現実的に唯一可能な「目覚め」として強調されるのである。

正嘉年間に親鸞と関東の門弟の間で交わされた書簡や『正像末和讃』『唯信鈔文意』『一念多念文意』『浄土三経往生文類』（広本）『如来二種回向文』などの和語聖教において、如来大悲の「撰取不捨」の働きにより、生きている間に正定聚に住し、必ず「完全な目覚め」に至ることが繰り返し説かれている。さらに正定聚に住する「真実信心の念仏者」は「補処の弥勒菩薩とおなじ」あるいは「如来とひとし」というように、極めて高調した表現でその尊厳が認められるようになる。この時期にこのように思想表現が進化発展した契機について文面には記されていないが、その背景には多くの人の死と苦悩があったのである。

大飢饉がもたらす悲惨な状況を前に、念仏者は多くの人の苦しみはどう応えていくべきなのか。人間が対処できるレベルを超えた圧倒的災害のなかで、他力の信にもとづいた慈悲は、どのような形で働き出るものなのか。最晩年の親鸞は、関東の心ある門弟と共にこの「現実社会が信心につきつける極限の問い」<sup>(21)</sup>に真剣に向き合ったのである。彼らは「念仏をふかくたのみて、世のいのりにこころをいれて、もうしあわせ」<sup>(22)</sup>ながら、本願念仏を極限まで突き詰めていった。正嘉年間の重要な書簡を集め書写した『御消息集』（善性本）は、その記録となる「大切の証文」である。このような観点から、あらためてこの二年間における親鸞思想の深化の過程をたどってみたい。

## 二 正嘉年間における親鸞思想の深化

八十五歳から八十六歳の二年間、親鸞の執筆量は飛躍的に増加している。現存する文書から判断するならば、その生涯で最も思索と著作に没頭した期間とすることができる。それらを表にしてみると左の「行実表」のようになるが、その集中の密度の濃さに驚かされる。この時期、自ら「目もみえず候う。なにごとともみなわすれて候ううえに、ひとなどにあきらかにもうすべき身にもあらず候う」<sup>(23)</sup>と語っている親鸞であるが、その高齢の身を突き動かし、筆を執らせる大きな力が働いていたことを思わざるをえない。

### 一二五七年（親鸞八十五歳）から一二五八年（八十六歳）の二年間の宗祖行実<sup>(24)</sup>

年号	年齢	月日	行	実	『真宗聖典』頁
康元二年 (一二五七年)	八十五	正月一日	★『西方指南抄』上末	校合奥書	五五九頁
		正月二日	★『西方指南抄』上本	奥書	
		正月二日	★『西方指南抄』中本	校合奥書	
		正月十一日	★『唯信鈔文意』	袖書顕智	
		正月二十七日	★『唯信鈔文意』	袖書信証	



<p>三月十四日 改元 正嘉元年</p>		<p>二月五日 二月九日夜寅時 二月十七日 二月二十七日 二月三十日 三月二日 三月五日 三月二十日 閏三月一日 閏三月二日 閏三月二十一日 五月十一日 六月四日 八月六日 八月十九日 十月六日 十月十日 十月十五日 十月二十一日 十一月十八日 十一月二十六日</p>	<p>『西方指南抄』下本（直弟〈真仏〉本、書写奥書） 夢告和讃『正像末法和讃』（弥陀の本願信すべし） ★『一念多念文意』奥書 『西方指南抄』中本（直弟〈真仏〉本、書写奥書） 『大日本国粟散王聖德太子奉讃』（真宗遺文纂要） 『浄土三経往生文類』広本 奥書（興正寺蔵） 『西方指南抄』上本（直弟〈真仏〉本、書写奥書） 『西方指南抄』中末（直弟〈真仏〉本、書写奥書） ★『正像末法和讃』草稿本（九首目まで真筆） 奥書 ○『御消息』（また五説といふは） （未燈鈔・八） 『如来二種回向文』真仏書写本 書写奥書 『上宮太子御記』本奥書 『浄土文類聚鈔延書』本奥書 『一念多念証文』本奥書 『唯信鈔文意』顕智書写 正嘉本 本奥書 ★『御消息』しのぶの御房（真仏）宛（たづねゝ撰取不捨） （善性本・四） ○『御消息』性信 宛（信心をえたるひとはかならず） （善性本・五） ○『御消息』真仏 宛（これは経の文なり） （善性本・六） ★『御消息』浄信 宛（たづねおせられてまことの） （広本・十五） 『御消息』専信 宛（おほせ候うところのゝ往生の業因） （善性本・七） 『御消息』随信 宛（御たづねそうろうことは弥陀他力の） （未燈鈔・十八）</p>	<p>五〇〇頁 五四六頁 四七五頁 六〇四〜〇五頁 四七七頁 五九〇頁 五九一頁 五九一〜九二頁 五七九〜八〇頁 五九二〜九三頁 六〇八〜〇九頁</p>
------------------------------	--	--	--	--

正嘉二年 (二二五八年)	八十六	二月十二日	「御消息」浄信 上書（無碍光如來の慈悲光明に） （善性本・二のイ）	五八八頁
		二月十八日	『三部經大意』真仏書写本奥書	
		二月二十五日	★「御消息」浄信 宛（如來の誓願を信ずる心のさだまる時） （善性本・二のロ、ハ）	五八八～八九頁
		三月八日	「御消息」慶西 宛（諸仏称名の願ともうし） （広本・十八）	五八一～八二頁
		五月五日	〈真仏 示寂〉	六〇五頁
		五月五日	「御消息」けうやうの御房 宛（御ふみくはしく～誓願） （未燈鈔・九）	六〇五～〇六頁
		五月五日	「御消息」しゃうしんの御房 宛（御ふみくはしく～一念 發起信心） （未燈鈔・十）	六〇五～〇六頁
		六月二十八日	★『尊号真像銘文』 広本 奥書	五三三頁
		七月十三日	「御消息」有阿弥陀仏 宛（たづね～念仏不審） （未燈鈔・十二）	六〇六～〇七頁
		九月二十四日	『正像末法和讃』顯智書写本 本奥書	
		九月下旬～十月上旬	〈覚信 示寂〉	
		十月十日	★「御消息」慶信 上書（畏申候） （善性本・一のイ）	五八三～八五頁
		十月二十九日（頃）	★「御消息」慶信 上書 親鸞が加筆（南无阿弥陀仏を） （善性本・一のハ）	五八五頁
		十月二十九日	蓮位添状 慶信 宛（この御ふみのやう） （善性本・三「一のハの添え書き」）	五八五～八八頁
		十二月	○「御消息」顯智自筆本奥書（獲字は因位のととき） 自然法爾 （未燈鈔・五）	六〇二～〇三頁

（★は真筆が現存。○は発信年が確かな消息、その他は推定による）

この二年間の執筆活動については、内容の上から前半と後半に大きく二分することができる。前半、正嘉元年八月十九日の『唯信鈔文意』顕智書写本奥書までは、前年建長八年（一二五六）五月末の善鸞義絶以降に取り組まれた法然と聖徳太子に関する真摯な学び直しの成果を関東の門弟に伝える著作群である。後半、正嘉元年十月六日の「しのぶの御房」（真仏）宛の書簡からは関東の門弟の問いに答える手紙が中心になり、『末燈鈔』第五通、正嘉二年十二月の「自然法爾」の法語によって結ばれる。「現生正定聚」は前半と後半に一貫して論じられているが、特に後半、正嘉元年十月以降の『御消息集』（善性本）に収められる書簡においては、「撰取不捨」をめぐる質疑応答が集中的に行なわれ、門弟の間に関心と理解が広まっていく様子が確認できる。

自然災害との関係からみると前半の著作群を執筆中の康元二年二月二十三日に京師大地震、三月三日には熊野大地震があり、正嘉元年閏三月二十五日にはサマラス山の巨大噴火によるものと思われる降灰があった。そして、正嘉元年八月二十三日の南関東大地震と三陸沿岸の津波の被害は、前半と後半を分ける時期に起こっている。康元二年の初めから顕智とともに京都の親鸞のもとに滞在した真仏は、『西方指南抄』・『正像末法和讃』（草稿本）・『如来二種回向文』などこの時期の重要な著作について面授口伝を受け、それらの真筆や写本を携えて九月までには関東に帰っている。真仏は関東の被災の状況を目にして親鸞にも手紙で知らせたものと推測される。

正嘉元年十月から真仏、性信、浄信、専信、随信、覚信、慶信など厚い信頼で結ばれた関東の同行との間に消息のやりとりが頻繁になり、その内容には右に述べたような大きな変化が認められるが、この時期の書簡の綿密な読解を行なった常盤井和子は、「何か相当強力な指導力が、時期を同じくし、広範囲に及んだとしか考えられない」として<sup>(25)</sup> それらの書簡の特異性に注意を促している。この時期に、一斉に広範囲に強力な指導力が発揮されるべき契機としては、八月二十三日の南関東大地震と津波の被災を想定することが最も理にかなっているように思われる。次節では、この八月二十三日までの前半と十月六日以後の後半に分けて、この二年間の著作に現れた「現生正定聚」の思想表現

の發展過程を確認したい。

### 三 康元二年正月から正嘉元年八月までの著作群

康元二年は、元旦に『西方指南抄』（上末）の校合奥書を書いて一年が始まっているが、この時期の親鸞は、前年の善鸞義絶以来の集中した思索の成果をまとめ、それを真仏・顕智などの指導者を通して関東の同朋に伝えることに努力を傾注している。親鸞晩年の思想展開に大きな影響を与えた出来事として関東における「造悪無碍」や「自力作善」といった自力のはからいにもとづく異義の蔓延があったが、念仏者を取り巻く関東の情況は混乱を極め、名代として送った長男の慈信房善鸞を建長八年（一二五六）五月二十九日付けの消息で義絶するという悲劇的な形で事件は一応の決着をみる。八十四歳の親鸞は、この善鸞事件を通して、真実信心を伝えることの難しさを痛切に感じたに違いない。深い悲しみの中で、この晩年におとずれた精神的危機を克服すべく、法然と出会って以来の自らの歩みを反省する徹底的な学びと思索を続けたようだ。義絶から二ヶ月後の七月二十五日には曇鸞の『浄土論註』上下巻の加点を終え、十月には法然の遺文を集めた大部の『西方指南抄』を書き始めている<sup>26</sup>。

年が明けて一二五七年前半は、京都を訪ねてきた真仏・顕智・専信らにこの間の思索の成果を正式に伝授した期間である。関東の門弟に託した著作には、『唯信鈔文意』『浄土三経往生文類』『如来二種回向文』などのように、善鸞義絶以前に成立していたものも含まれるが、この時期に推敲を加え加筆されていることに注意する必要がある。その推敲・加筆が「現生正定聚」「還相回向」に関わる部分に特徴的に見られるのは、真仏や顕智に面授する過程でその重要性に対する認識が一段と深まり、文章の入念な推敲がなされたためと思われる。

(1) 『唯信鈔文意』

晩年の親鸞の思想を表す著作群のうちで最初期の内容を示す『唯信鈔文意』の場合、現生正定聚については、聖覚の『唯信鈔』に引用される『五会法事讀』の「観音勢至自来迎」という句を説明する段の「自」と「迎」の字義を解釈する文脈の中に述べられる。康元二年正月から正嘉元年八月の九箇月間に書写されたものとみると、正月十一日と二十七日に書かれた真蹟二本には二箇所（左の① b・c）、八月十九日の奥書をもつ顕智書写本には三箇所（② a・b・c）「正定聚」の用例がある。正月の真筆本と八月の顕智書写本を比較対照すると、後者において「正定聚」「无上覚」「等正覚」「補処の弥勒」などが加筆され、「現生正定聚」が思想的に発展していることが分かる。<sup>27)</sup>

① 正月二十一日真筆本

(a) 誓願眞實の信心をえたるひとは、攝取不捨の御ちかひにおさめとりてまもらせたまふによりて行人のはからひにあらざ、金剛の信心をうるゆへに憶念自然なるなり、この信心おこることも釋迦の慈父・彌陀の悲母の方便によりておこるなり、これ自然の利益なりとするべし<sup>28)</sup>となり。

〔『定親全』三、和文篇一五九頁〕

② 八月十九日顕智書写本（傍線部が推敲加筆部分）

(a) 誓願眞實の信心をえたるひとは、攝取不捨の御ちかひにおさめとりてまもらせたまふによりて、行人のはからひにあらざ、金剛の信心をうるゆへに、正定聚のくらゐに住すといふ。このころなれば、憶念の心自然におこるなり。この信心のおこることも、釋迦の慈父・彌陀の悲母の方便によりて无上の信心を發起せしめたまふとみえたり。これ自然の利益なりとするべし。

〔『影印高田古典』第四卷、四四八～九頁〕<sup>31)</sup>

(b) 選擇不思議の本願・無上智慧の尊号をきゝて、一念もうたがふころなきを眞實信心といふなり、金剛心ともなづく。この信樂をうるとき、かならず攝取してすてたまはざれば、すなわち正定聚のくらゐにさだまらなり。<sup>(29)</sup>

(同、一六〇頁〜一六一頁)

(c) 即得往生は、信心をうればすなわち往生すといふ、すなわち往生すといふは、不退転に住するをいふ、不退転に住すといふはすなわち正定聚のくらゐにさだまるとのたまふ御のりなり、これを即得往生とはもうすなり。即はすなわちといふ、すなわちといふはときをへず日をへだてぬをいふなり。<sup>(30)</sup>

(同、一六一頁)

(b) 選擇「不思議の」本願の尊号、無上智慧の信心をきゝて、一念もうたがふころなければ、眞實信心といふ。この信心をうれば等正覺にいたりて、補處の彌勒におなじくして、無上覺をなるべしといへり。すなわち正定聚のくらゐにさだまらなり。<sup>(32)</sup>

(同、四五三頁)

(c) 即得往生は、信心をうればすなわち往生すといふ、すなわち往生すといふは、不退転に住するをいふ、不退転に住すといふはすなわち正定聚のくらゐにさだまらなり、成等正覺ともいへり。これを即得往生といふなり。即はすなわちといふ、すなわちといふはときをへず日をへだてぬをいふなり。<sup>(33)</sup>

(同、四五四〜四五頁)

## (2) 『一念多念文意』

二月十七日に書かれた『一念多念文意』(真筆本)の場合、「正定聚」の用例は全編に渡って八箇所におよび、「現生正定聚」が「文意」説明部分の主題になっているということもできる。田舎の人びとのために「やすくころえさせんとて、おなじことを、とりかえしとりかえしかきつけたり」という後書きの通り、「現生正定聚」の意味を繰り返して丁寧の説明している。右の『唯信鈔文意』の用例(c)に相当する、本願成就文を逐語釈する箇所は、『一念多念文意』では次のようになっていゝ。

即得往生といふは、即は、すなわちといふ、ときをへず、日おもへだてぬなり。また即はつくといふ、そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得は、うべきことをえたりといふ、眞實信心をうれば、すなわち无碍光佛の御こゝろのうちに攝取して、すてたまはざるなり。攝はおさめたまふ、取はむかえとるとまふすなり。おさめとりたまふとき、すなわち、とき日おもへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを、往生をうとはのたまへるなり。

〔定親全〕三、和文篇一二七頁―二二八頁<sup>(34)</sup>

ここで「正定聚」には「往生すべき身と定まるなり」と左訓が付いている。このあと第十一願（必至滅度）とその成就文が引用され、後者の「其有衆生 生彼国者 皆悉住於正定之聚」という漢文は「それ衆生あつて、かのくにうまれんとするものは、みなことごとく正定の聚に住す<sup>(35)</sup>」というように延べ書きされており、まだ浄土に生まれていない願生者が現生において正定聚に住するのだということを示している。

### (3) 『浄土三経往生文類』（広本）と『如来二種回向文』

右の点について、三月二日に書写された『浄土三経往生文類』では、さらにはつきりした文章になっている。

念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらゐに住して、かならず眞實報土にいたる。これは阿彌陀如来の往相廻向の眞因なるがゆへに无上涅槃のさとりをひらく、これを『大經』の宗致とす。このゆへに大経往生とまふす、また難思議往生とまふすなり。

〔定親全〕三、和文篇二頁

『浄土三経往生文類』は、親鸞八十三歳のときに略本が成立しているが、広本では大経往生（難思議往生）の部分の結びに、『如来二種回向文』をもとに還相回向の要文が加えられていることが特に注意される。<sup>(36)</sup>

『浄土三経往生文類』（広本）と『如来二種回向文』は、往相回向について、眞實の行業・信心・証果として第十七願（諸仏称名）・第十八願（念仏往生）・第十一願（必至滅度）を引き、その悲願の成就として現生正定聚を位置づ

けるが、それに続いて還相回向について第二十二願（一生補処）を引いているのである。その還相回向の願、「大悲の願」によって、現生に正定聚の位に就いた念仏者、「成等正覚」とも「補処の弥勒に同じ」ともいわれる眞実信心の行者の上に、還相の菩薩と同様の利他の働きが現れ出ることを示唆している。

親鸞が第二十二願を「大慈大悲の願」「大慈大悲誓願」と呼ぶのは、『浄土三経往生文類』（広本）と『如来二種回向文』に限られており、同様の意味で「大慈大悲」という言葉を用いるのは『唯信鈔文意』や『正像末法和讃』など、晩年のこの時期の著作に特徴的であることが指摘されている。<sup>(37)</sup>『歎異抄』第四章の「浄土の慈悲というは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもつて、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり」という言葉も、この時期の還相回向に関する思索にもとづいて発せられたものと考えられる。

『浄土三経往生文類』（広本）は、還相回向の願を引用した後、次のように大経往生をまとめていっている。  
如来の二種の廻向によりて、眞實の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらゐに住するがゆへに、他力とまふすなり。

しかれば、『無量寿経優婆提舍願生偈』曰。「云何回向。不捨一切苦惱衆生、心常作願、  
回向為首得成就大悲心故」これは『大无量寿経』の宗致としたまへり。これを難思議往生と  
まふすなり。  
（『定親全』三、和文篇一八頁）

真仏が閏三月二十一日に書写した『如来二種回向文』は次のように結ばれる。

これは如来の還相廻向の御ちかひなり。これは他力の還相廻向なれば、自利・利他ともに行者の願樂にあらず。法蔵菩薩の誓願なり。他力には義なきをもて義とすと、大師聖人はおほせごとありき。よくよくこの選擇悲願をこゝろえたまふべし。  
（同、二二〇頁）

「一切苦惱の衆生を捨てず」という如来の大悲は、「（浄土に）往く・還る」という二つの方向性をもつ働きとなつて



衆生のもとに届けられる。その働き（「人を動かす力」）が衆生の心に現れ出ることによって苦悩の生に変容をもたらす、自然で柔軟な「動き」となって展開していく。大悲心が成就するのは、その動きが連続無窮に継続することによる。正定聚に住し「往生すべき身と定まる」ということは、法蔵菩薩がその誓願を成就し続けるところの還相回向の流れに入り、それに同化していく過程が始まることである。他力を受容することと、その働きに同化することは、自我の「はからい」が残っている現生においては自然に連続しないけれど、「ただ念仏して」「愚者となる」とときには自ずから一致する。法然の「義なきを義とす」という言葉を想起しながら、この時期の親鸞は「現生正定聚」を「大慈大悲」に結びつける思索を深めていたのである。それは、『教行信証』信巻に説かれる念仏者の現生十益のうち、最後に挙げられる「入正定聚」と「常行大悲」を、還相回向を通して結びつけるものである。

#### (4) 『正像末法和讃』（草稿本）

現生正定聚と二種回向についての思索は、この時期に著された和讃の中にも表現されている。

正嘉元年閏三月一日の奥書がある『正像末法和讃』（草稿本）の冒頭四首は、現生正定聚と還相回向という主題でつながっている。

(一首目) 五十六億七千萬 彌勒菩薩はとしをへむ

念佛往生信ずれば このたびさとりはひらくべし

(二首目) 念佛往生の願により 等正覺にいたる人

すなわち彌勒におなじくして 大般涅槃をささるべし

\* 「等正覺」左訓…正定聚の位をいうなり 彌勒を等正覺ともうすなり<sup>(38)</sup>

(三首目) 眞實信心をうるゆへに すなわち定聚にいりぬれば

補處の彌勒におなじくて 无上覺を証すべし

\* 「无上覺」左訓…大般涅槃をもうすなり

(四首目) 南无阿彌陀佛をとなふれば 衆善海水のごとくなり

かの清淨の善みにえたり ひとしく衆生に廻向せむ

\* 二句目左訓…弥陀の功德の際なきことを海の水に譬ふるなり

\* 三句目左訓…ナモアミタフチと称うれば 名号におさまれる功德善根を みな賜ると知るべし

\* 四行目左訓…名号の功德善根を よろずの衆生に与うべしとなり (『定親全』二、和讃篇一四三頁)

この四首目は、龍樹『十二礼』の回向文「我說彼尊功德事 衆善無辺如海水 所獲善根清淨者 回施衆生彼国<sup>39)</sup>」を和讃にしたもので、前年建長八年(一二五六)に『浄土高僧和讃』の再治を終えてその末尾に付された顕智書写本の段階では、一句目は原漢文の意味に近い形で「南无阿弥陀仏をとけるには」とされた<sup>40)</sup>。その場合、阿弥陀仏の無量の功德を説く能化としての釈迦や諸仏・菩薩が主語となり、その還相の働きを表すので、七高僧の徳を讃える和讃集の回向文としてふさわしい意味をもつ。『正像末法和讃』(草稿本)においては「南无阿弥陀仏をとなふれば」と改められ、主語が名号を称える念仏者に変わっている。それによって、正定聚に住する念仏者は、還相の菩薩と同じように、その身に受けた回向の働きの担い手に変容していくことが示されているのである。

『正像末法和讃』(草稿本)には、十八首目から二十三首目など、ほかにも同様の思考の流れを表す和讃が含まれている。中でも二十首目は正定聚における利他の働きを強調している点において注意される。

(二十首目) 如來の廻向に歸入して 願作佛心をうるひとは

自力の廻向をすてはてて 利益有情はきわもなし

\* 一句目左訓…弥陀の本願を我らにあたえたまいたるを回向と申すなり

\* 四句目左訓…よろづの衆生を有情とはいふなり

(『定親全』二、和讃篇一四七頁)

また二十三首目は、この時期の親鸞思想の指標となる「撰取不捨の利益」という定型表現が、回向の働きと現生正定聚の必然的つながりを表すために用いられている点で重要である。

(二十三首目) 弥陀智願の廻向の 信樂まことにうるひとは

撰取不捨の利益にて 等正覺にはいたるなり

\* 二句目左訓…眞實信心をうる人といふなり

\* 三句目左訓…信心の人を弥陀如来おさめとり給うと申すなり

\* 四句目左訓…正定聚の位に至ると知るべしとなり

(『定親全』二、和讃篇一四八頁)

「撰取不捨」は「光明遍照十方世界 念仏衆生撰取不捨」という『観経』真身觀の一節に由来し、法然もよく用いた言葉なので、当時の念仏者には「他力回向」「本願力回向」といった専門的術語に比べると広く知られていた。親鸞も本願成就文を説明する文脈でしばしば用いている<sup>(41)</sup>。しかし、これを「利益」と結びつけた「撰取不捨の利益」という定型句は、「現生正定聚」の思索を深めていたこの時期の親鸞が感得した独自のものである。本願力回向の働きがすべての念仏者におよび、その力を受容したものに「眞實の利」が恵まれるといふことを表す表現として、『正像末法和讃』に二例、『御消息集』(善性本)に二例<sup>(42)</sup>があり、『歎異抄』第一章冒頭に唯円が記した「念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり」という言葉によって最もよく知られている。『正像末法和讃』におけるもう一例は、この時期の親鸞を代表する二月九日の夢告和讃である。草稿本では三十五首目に以下のように特記して編入され、翌正嘉二年九月の顕智書写本では巻頭に掲げられ、『御消息集』(善性本)には巻尾に収められている。

康元二歳丁巳二月九日の夜寅時夢告にはく

彌陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな

攝取不捨の利益にて 无上覺をばさとるなり

この和讃をゆめにおほせをかふりてうれしさにかきつけまいらせたるなり

正嘉元年丁巳三月一日

愚禿親鸞八十五歳書之

〔定親全〕二、和讃篇一五一―二頁

この和讃を夢の中で親鸞に告げたのは、法然であろうと推測される。<sup>(43)</sup>二月九日は『西方指南抄』を脱稿してまだ日が浅く、真仏が親鸞のもとで書写を続けている間のことである。さらにこの日は、五十年前の承元の法難で法然とその門下が捕えられ、安楽が処刑された命日にあたる。夢に現れた法然が、本願を信ずる念仏者は「攝取不捨の利益」によってみな必ず仏になるという授記を与えたのであるから、親鸞の喜びはほんとうに大きかったに違いない。この夢中の授記は、法然の仰せを学び直した精華であり、これによって親鸞は善鸞事件以来の危機を乗り越えたものと思われる。

この夢告和讃を感得した二月九日からそれを草稿本に書き記す閏三月一日までの約五十日の間に、京都では二月二十三日に大地震、熊野でも三月三日に大地震があり、さらに三月十四日には太政官が炎上するなど災異が続いたために改元が行われ、康元から正嘉に変わっている。それらが直接親鸞の思索に影響を与えたことを示す手がかりは見出せないが、この間、承元の法難を想い起し、また聖徳太子の伝記にもとづく『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』(二月三十日奥書)に「和国の有情をあわれみて」と詠みながら、夢告和讃がもつ意味を考え続けていたものと思われる。<sup>(44)</sup>聖徳太子については『皇太子聖徳奉讃』の一首目、四首目、五首目、十一首目に、次のように讃え、その恩徳に謝している。ここにも正定聚と慈悲(めぐみ、あわれみ)と二種回向をめぐる思想の深化がみられる。

(一首目) 佛智不思議の誓願の 聖徳皇のめぐみにて

正定聚に歸入して 補處の彌勒のごとくなり

(四首目) 聖徳皇のあはれみて 佛智不思議の誓願に

す、めいれしめたまひてぞ 住正定聚の身となる

(五首目) 他力の信をえんひとは 仏恩報ぜんためにとて

如來二種の廻向を 十方にひとしくひろむべし

(十一首目) 聖徳皇のおあはれみに 護持養育たへずして

如來二種の廻向に す、めいれしめおはします

〔定親全〕二。和讃篇二〇二―七頁

聖徳太子と法然は、親鸞が観音・勢至と仰いだ還相の菩薩である。親鸞はあらためてその導きに感謝しつつ、「撰取不捨の利益」について深く思いをめぐらしたものと思われる。『正像末法和讃』において、「撰取不捨の利益にて等正覚にはいたるなり」(二十三首目)「無上覚をばさとるなり」(夢告和讃)と、ともに断定の助動詞によって強調された表現は、「一切苦悩の衆生を捨てず」「回向を首として大悲心を成就する」本願力の働きたいする確信を表している。

以上、八十五歳の親鸞が「現生正定聚」について集中的に思索を深めていた正嘉元年八月までの著作群についてその特徴を概観してきた。善鸞義絶後の深い悲しみの中で数ヶ月におよぶ徹底的な学び直しに取り組み、その精華としてこの時期に到達したのが「撰取不捨の利益」という独自の表現によってあらわされる、還相回向を重視した「現生正定聚」の受けとめである。その思想深化の背景には、「大慈大悲」が現に働かなくては救いがみえないような大災害の萌しがあった。『正像末法和讃』などこの時期に成立した和語聖教の多くは、京都に滞在して面授口伝を受けた真仏によって、その年の九月初めまでには関東にもたらされたと推定される。やがて正嘉二年から飢饉が深刻な情況になるにつれて、関東の門弟と親鸞の間で消息のやりとりが活発になり、「現生正定聚」から「浄土の慈悲」へと思

想はさらに展開していく。後編では、その時期の書簡を集めた『御消息集』（善性本）と『歎異抄』四章を中心に考察することにした。

## 注

- (1) 主な研究として以下を参照。信楽峻磨「親鸞聖人における現生正定聚の意義」『龍谷大学論集』第三六五号（一九六〇年）一五〇～一六四頁。同「親鸞における現世往生の思想」『龍谷大学論集』第四三〇号（一九八七年）二六～五四頁。本多弘之「現生正定聚―その核心と外延―」『親鸞教学』第三四号（一九七九年）七二～九一頁。松原祐善「現生不退論」『親鸞教学』第三六号（一九八〇年）一～二〇頁。梯實圓「救いということ―とくに現生正定聚をめぐって」『仏と人』三九～四三号（無名会、同人編、永田文昌堂、二〇〇五～七年）。
- (2) 代表的な研究として以下を参照。森龍吉「自然法爾」消息の成立について」『史学雑誌』六〇七（山川出版社、一九五一年）一～三九頁。松野純孝「親鸞―その生涯と思想の展開過程」（三省堂、一九五九年、『増補 親鸞』として東本願寺より再刊、二〇一〇年）第九章「親鸞とその門弟」第三～四節、四五七～五〇二頁。柏原祐泉「自然法爾章」の性格」『印度学仏教学研究』三六二（一九八八年）四八二～九三頁。
- (3) 吉本隆明の論稿「最後の親鸞」は、初め雑誌『春秋』の一九七四年二・三月合併号に掲載された。その後「和讃」（一九七五）「ある親鸞」（一九七六）「親鸞伝説」（一九七六）と合わせて、論稿と同じ『最後の親鸞』という書名で出版された。一九八一年には「教理上の親鸞」を加えた増補版が出ている。「最後の親鸞」以前、一九七一年から七三年にかけて「聞書・親鸞」を『春秋』に連載していたので、吉本は一九七〇年代の約十年にわたって集中的に親鸞の著作を読み続け、その思想の主體的解明に取り組んでいたことになる。「大衆の原像」を思想の基盤においた吉本は、真宗門徒の家に生まれて若いころから親鸞の言葉に親しみ、親鸞の考え方や生き方に強く魅かれていたと語っている。その吉本による『最後の親鸞』の重要な主題の一つは、多くの人々が苦しみ、為す術もなく死んでいく悲惨な世界における人間の慈悲のあるべき姿、それを限界まで突き詰めていった親鸞の思索である。

- (4) この文脈を重視した数少ない先行研究として以下を参照。柿本理海「現生正定聚義の成立について」『印度学仏教学研究』

十五一（一九六六年）一七二～三頁。靈山勝海「歎異抄第四章の背景―なぜ衆生利益が問題なのか―」『真宗研究』二九号（一九八四年）一一四～二六頁。龜山純生『災害社会』・東国農民と親鸞浄土教（農林統計出版、二〇一二年）一四～五〇頁、九二～一二四頁。

(5) 寛喜の内省は、災害に苦しむ人々のために自分のできることをしたいという自発的な慈悲の心と、「ただ念仏」という他力の信の徹底の間で揺れ動いた親鸞の葛藤を伝えるものである。この点については、以下の著作を参照。平雅行「若き日の親鸞」『真宗教学研究』二六号（真宗教学学会、二〇〇五年）一〇七～一二六頁、同「寛喜の大飢饉と親鸞」『伝道』七九号（本願寺出版、二〇一三年三月）五六～六〇頁、同「親鸞のあゆみと民衆」『ともしび』七三二号（真宗大谷派教学研究、二〇一三年十月）六～九頁。一楽真「関東の親鸞―三部経千部読誦の中止を通して―」『親鸞教学』第九六号（二〇一一年）五七～七九頁。網野善彦『日本社会の歴史（中）』（岩波書店、一九九七年）一三八頁。

(6) 『定本親鸞聖人全集』第三巻書簡篇一九一、一九三頁。『真宗聖典』六一八、六一九頁。『恵信尼消息』を主題とする真宗史学研究は当然この部分に注意している。近年のものとしてジェームズ・C・ドビンズが「恵信尼の世界」を描き出した以下の研究を参照。James C. Dobbins, *Letters of the Nun Estinni: Images of Pure Land Buddhism in Medieval Japan* (University of Hawaii Press, 2004). 特に中世日本社会における飢饉 (famine) に関しては、五五～六頁。

(7) 『高田学報』第九十四輯（二〇〇六年）に「資料復刻」として『善性本御消息集』影印版が掲載されており（九九～一六一頁）、〔研究史〕〔問題点〕を含めた平松令三による資料解説が付されている（九四～九八頁）。宮崎円遵によれば、「正嘉二年（一二五八年、聖人八十六歳）から余り下がないころ」に飯沼の善性房によって書写された最も古い『御消息集』である。

(8) この点については浜垣誠司「イーハトーブ〈災害〉学―情熱<sup>パッション</sup>から受苦<sup>パッシング</sup>へ―」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報』第四三号、八～九頁、同「文応元年の日蓮と親鸞」（インターネットサイト『宮沢賢治の詩の世界』二〇一一年十月二日付ブログ）を参照。精神科医であり宮沢賢治研究者でもある浜垣は、賢治の中には熱心な門徒の家で思春期までに薫習された「浄土の慈悲」と、青年期以降に傾倒した日蓮の「聖道の慈悲」という両側面が共在していたことを示唆している。

(9) 『吾妻鏡』巻四十七、国史大系第五巻五六三頁。

(10) 山奈宗真『岩手県沿岸大海嘯取調査』には「正嘉一化」元年地震あり。八月二十三日、野田海と久慈の海と津波越へたりと

云」と記述がある。『大日本地震史料 増訂第一巻 自懿徳天皇御宇至元祿七年』二六九〜七〇頁を参照。この時の地震と津波の全貌は未解明であるが、南海トラフ地震であった可能性が指摘されている。小山真人「日本の史料地震学研究の問題点と展望―次世代の地震史研究に向けて―」『地学雑誌』一〇八巻四号（一九九九年）三五六頁参照。古代中世地震史料研究会（代表 石橋克彦・小山真人）作成の「古代・中世」地震・噴火史料データベース（β版）<http://sakyu.edshizuoka.ac.jp/erice/>によれば、一二五七年（康元二年、正嘉元年）年は、年間を通じ列島各地で地震が頻発しており「康元二年二月己卯〔二十三日〕、京師大地震」（『続本朝通鑑』）という記述もある。八十五歳『正像末和讃』を執筆中の親鸞もこれに遭遇しているはずである。

(11) 『立正安国論』の成立と自然災害の関係に関しては、佐藤妙晃「『立正安国論』の研究―「勘文」の視点から―」『日蓮教学研究所紀要』第三四号（二〇〇七年）二七〜四〇頁を参照。

(12) 大正大蔵経八四巻二〇八頁上段。訓読は田中智学『訓訳読本 立正安国論』（立正安国会大阪布教所、一八九四年）を参照。現代語訳は、藤井学訳『大乘仏典（中国・日本篇）二四 日蓮』七一頁。

(13) 『ナショナル・ジオグラフィック・ニュース』（電子版）二〇一三年九月三〇日。

<http://news.nationalgeographic.com/news/2013/09/130930-volcano-science-historic-eruption-indonesia-rinjani-mystery-disaster/>

(14) 『帝王編年記』巻二十五、国史大系第十二巻『扶桑略記・帝王編年記』（吉川弘文館、一九三五年）四一一頁。

(15) 神無久「一二五八年の天変地異」『サイエンスあれこれブログ』（二〇一二年八月十三日）参照。[http://blog.livedoor.jp/science\\_q/archives/1684567.html](http://blog.livedoor.jp/science_q/archives/1684567.html) 巨大火山噴火とその環境への影響の大きさについては石弘之『歴史を変えた火山噴火―自然災害の環境史―』（刀水書房、二〇一二年）を参照。

(16) 『百鍊抄』第十七、国史大系第十四巻三四一頁。

(17) 『定本親鸞聖人全集』第三巻書簡篇二二頁。『真宗聖典』五八七頁。覚信の最期については、覚如の『口伝鈔』にも伝えられている。『真宗聖典』六六八〜七〇頁。

(18) 『定本親鸞聖人全集』第三巻書簡篇七四〜五頁。『真宗聖典』六〇三頁。



(19) 初期大乘、特に浄土教における菩薩の目標としての「法忍」(dharma-ksanti) および「無生法忍」(anutpatika-dharma-ksanti) の意味については、以下を参照。Ingo Strauch, "More Missing Pieces of Early Pure Land Buddhism: New Evidence for Aksobhya and Abhirati in an Early Mahayana Sutra from Gandhara." in *The Eastern Buddhist* NS41-1 (2010) . pp. 29-44. Jan Nattier, *A Few Good Men: The Bodhisattva Path According to the Inquiry of Ugra (Ugrapariprecha)*, University of Hawaii Press, 2003, pp.244, note 240. (『無量寿経』においては、浄土の道場樹から十方一切の仏国に普く流れる妙なる法の音を聞き、色を見、香りを知り、光に触れ、味を嘗め、法を心に思うだけで、「みな甚深の法忍を得、不退転に住し、仏道成ずるに至る」と説かれる。また浄土の人天でこの道場樹を見る者は「三法忍」すなわち「音響忍・柔順忍・無生法忍を得る」とされる。これらは「みな無量寿仏の威神力の故、本願力の故」であると説かれる(『大阿弥陀経』大正大藏経第十二卷三四四頁上段、『無量寿経』大正大藏経第十二卷二七一頁上段)。「観無量寿経」の結びの得益分では、釈尊の所説を聞き、極樂世界の莊嚴および仏と二菩薩を見た韋提希と五百人の侍女が「心に歓喜を生じ、未曾有なりと歎す。廓然として大きに悟りて、無生忍を得」と説かれる。この無生忍は、三忍(喜忍・悟忍・信忍)とも表されるが、逆境にある人びとが仏法に出会い、その働きを信頼することによって現生において正定聚に入る「積極的な忍耐」である。

(20) 『真宗聖典』六〇三頁。

(21) 吉本隆明『最後の親鸞』(春秋社、一九七六年)二十頁。

(22) 『定本親鸞聖人全集』第三巻書簡篇二二八頁。『真宗聖典』五六八頁。この七月九日付け性信宛の消息は年が記されていないが、内容から建長八年(一二五六)五月二十九日の消息で善鸞を義絶した後に書かれたものと推定される。「世のいのりにころいれて」という親鸞の思いは、信心の社会性を示しており、それは関東の門弟の指導的立場にある性信や真仏に共有されていたと考えられる。同じ手紙の中で親鸞は次のように述べている。「わが身の往生、一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念仏、ころにいれてもうして、世のなか安穩なれ、仏法ひろまると、おぼしめすべしとぞおぼえそうろう。よくよく御案そうろうべし。」このような思いを抱く念仏者が、翌年からの正嘉の大災害に遭遇したとき、どのようにそれを受けとめて行動したかということに思いをめぐらす必要がある。

(23) 正嘉元年閏三月二日の『末燈鈔』第八通。『定本親鸞聖人全集』第三巻書簡篇、八二頁。『真宗聖典』六〇五頁。

- (24) 表の作成にあたって以下を参照。常磐井和子「末灯抄を読み解く」七・八・九〔『高田学報』九十三・四・五所収の表、多屋頼俊「親鸞聖人消息総目録」(著作集第三卷「親鸞書簡の研究」八九〜九二頁)、細川行信・村上宗博・足立幸子「現代の聖典 親鸞書簡集 全四十三通」(法蔵館、二〇〇二年)一八四〜五頁「親鸞書簡一覽表」、阿満利磨「親鸞からの手紙」(ちくま学芸文庫)二七四〜七六頁「消息一覽」。
- (25) 常磐井和子「末灯抄を読み解く七」〔『高田学報』第九十三輯(二〇〇五年)二七頁。同「末灯抄を読み解く八」〕〔『高田学報』第九十四輯(二〇〇六年)二頁。〕
- (26) 山田恵文「親鸞と『西方指南抄』」〔『親鸞教学』第九六号(二〇一一年)二一〜三七頁参照。〕
- (27) 「唯信鈔文意」諸本の詳細な比較については以下を参照。門川徹真「唯信妙文意」の書誌学的研究―流布本の特異性について〔『真宗研究』四五号(二〇〇一年)一六二〜八二頁。ここに示した箇所に関しては常磐井和子「末灯抄を読み解く七」〔『高田学報』第九十三輯(二〇〇五年)二八〜九頁の対照表を参照。〕
- (28) 『真宗聖典』五四九頁二〜四行目。
- (29) 同、十二〜十五行目。
- (30) 同、十六行〜五五〇頁三行目。
- (31) 『真宗聖教全書』第二巻、六二三〜二四頁。但し「金剛の信心をうるゆへに」は「金剛の信心となるゆへに」となっている。
- (32) 同、六二四〜五頁。
- (33) 同、六二五頁。
- (34) 『真宗聖典』五三四頁六〜十行目。『増補親鸞聖人真蹟集成』第四巻三〇四〜〇六頁。正定聚には「往生すべき身と定まるなり」と左訓がある。
- (35) 『真宗聖典』五三六頁二〜三行目。『定本親鸞聖人全集』第三巻和文篇、一二九頁五〜六行目。「正定の聚」には「必ずほとけになるべき身となれるなり」という左訓がある。
- (36) 『浄土三経往生文類』広本における還相回向の展開の意義については幡谷明「浄土三経往生文類試解」(東本願寺 平成四年度 安居本講)一七七〜九〇頁の詳細な解説を参照。また同じく幡谷明『浄土三経往生文類』広本について「興正寺(平

成十九年度安居「課外」講義録」四二～三頁に大きな示唆を受けた。

(37) 幡谷明『浄土三経往生文類試解』一七八頁。

(38) 草稿本は九首目まで真筆であるが、その左訓(原文カタカナ)は宗祖のものではないとされる。筆跡はよく似ており、おそらく真仏が親鸞に面授した折に丁寧に記したものと考えられる。『増補親鸞聖人真蹟集成』第三卷二七五～七八頁参照。

(39) 親鸞は現存する著作中の最後となる八十八歳の文応元年(一二六〇)十二月二日奥書をもつ『弥陀如来名号徳』の中に、この龍樹『十二礼』の偈文(初めの二句)を引用している(『定本親鸞聖人全集』第三卷和文篇、二三〇～三二頁)。「十二礼」は、善導の『往生礼讃偈』に中夜讃として収められている(大正大藏経第四七卷四四二頁下段十三～四行)。「集諸経礼懺儀」大正大藏経第四七卷四七〇頁上段二七～八行)。

(40) 『定本親鸞聖人全集』第二卷和讃篇、一三九頁。『真宗聖典』五〇〇頁。

(41) 小川直人「現生正定聚―撰取不捨の視点から―」『真宗教学研究』第三二号(二〇一一年)三八～五二頁を参照。

(42) 他に、八十三歳のときの『尊号真像銘文』(略本)において、善導『観念法門』の「総不論照撰 余雑業行者」を説明する中に一例あるが、それは註釈の中で本願の行者以外は「撰取不捨の利益にあずからずとなり」という否定の文脈なので、ここでは除く。

(43) 山田恵文「親鸞と『西方指南抄』」『親鸞教学』第九六号(二〇一一年)二九～三二頁、阿満利磨『親鸞からの手紙』(ちくま学芸文庫、二〇一〇年)一八七頁を参照。

(44) 夢告和讃を『正像末法和讃』草稿本に記すまでの「五十日程の時間のズレ」の問題については、井上円『宗祖と越後』(真宗大谷派高田別院、二〇〇七年)二三～四頁、二七頁注七を参照。